

# 産官学の フューチャープラン

京都府

第7回

し、化合物半導体や高周波フィルター、MEMSの発展に貢献してきた。半導体に続く新領域として、近年は新エネルギー

△氏(ラムリサーチ創業者)らCVD・ドライエッチングの草分け的存在となった研究者たちとの知遇を得た。帰国後、アモルファス太陽電池へのプラズマ技術応用を模索するなかでガレージカンパニーとして創業したのがサムコだ。だが、その際に開発した初号機を購

分子線エピタキシー装置の研究開発を行っていたが、産業界での実用化は長らく困難とされてきた。それが近年になってようやく実現し、「技術の産業化には40~50年かかる」と、辻氏は長期にわたる粘り強い取り組みの重要性を強調する。

また、研究での連携に加えて人材育成にも取り組んでいる。京都工芸繊維大学に辻氏が寄付講座を開設し、22年に人材育成プロジェクトを開始した。「企業人ドクター」の育成を掲げ、40代半ばの企業研究者をターゲットとして将来の中核を担う人材を育てるための専門教育を行う。企業の将来を担い、後進を指導していくリーダーの創出につなげる狙いだ。

開発拠点においても産学連携を強く意識している。本社近隣で24年末の完成を予定して新たな研究開発施設を建設しているが、SiCやGaNなどの最先端研究開発設備を導入するほか、大学からの人材受け入れも計画している。辻氏は産学連携のあり方は「一方的にリソースを消費するのではなく、相互的でなければならぬ」と語る。

## 創立前から大学と密接

▼ 346

やライフサイエンス分野にも注力している。同社は創業期より大学と密接な関係を構築し、研究開発で協業していることも知られる。創業者で代表取締役会長兼CEOの辻理氏によれば、大学との関わりは創業以前に遡る。1970年代に勤務先の分析機器メーカーから京都大学に派遣された辻氏は、高精度分析の領域でイノベーション

## 産業集積への活動も開始

された経緯は辻氏の原点になったという。その後、70年代半ば、有機物中の軽元素である酸素や炭素、窒素に関心を持った辻氏は米国でNASAの研究者となり、プラズマ技術の実用化に取り組み。ちょうど発展途上期にあった半導体産業ではプラズマ応用が活発で、ジョン・ホラン氏(アプライドマテリアルズ)やデビッド・ラ

入したのは米国メーカーであり、辻氏は実績などを理由に購入に踏み切らない日本の大企業の姿勢に疑問を抱いたという。

この協業が習慣になっていくこともあり、サムコにとって産学連携は決して高いハードルではないという。近年では包括連携協定など組織間のつながりが増えているものの、個人の持つ素養・経験・深い知見がティップテックの開発には不可欠である。

辻氏は、アカデミアにおける若手研究者の育成にも貢献するため、16年に私財を投じてサムコ科学技術振興財団を設立した。薄膜・表面科学分野の研究者に対する助成事業を行っており、23年度までに累計39人の研究者を助成した。

2024年に設立45周年を迎えるサムコ(株)(京都市伏見区)は、薄膜技術をコアにCVD、エッチング、洗浄装置を展開

また、研究での連携に加えて人材育成にも取り組んでいる。京都工芸繊維大学に辻氏が寄付講座を開設し、22年に人材育成プロジェクトを開始した。「企業人ドクター」の育成を掲げ、40代半ばの企業研究者をターゲットとして将来の中核を担う人材を育てるための専門教育を行う。企業の将来を担い、後進を指導していくリーダーの創出につなげる狙いだ。

領域一体での産業振興への取り組みも開始。同社が立地する京都市南部にある東高瀬川地域の約43万㎡の地域に産業集積を目指す、「東高瀬川ビジネスコミュニティ」を立ち上げた。同地域は京都市成長産業創造センター(ACT京都)が立地し、中小企業も点在する。他地方の企業からも進出したいという声

もあり、産業界のポテンシャルがある。辻氏は年商数十億~数百億円の「中堅企業」の育成こそが日本の産業・経済の発展に重要な考えを持っており、東高瀬川地域の産業集積はその一手となる。また、高瀬川を上流に遡ると(株)島津製作所の創業の地に行きつく。辻氏は同社創業者の初代島津源蔵こそが日本の近代科学ならびに産業界の原点であるとし、そこに立ち戻らなくてはならないと説く。加えて、高瀬川を下ると淀川を経て大阪湾に至り、海を通じてグローバルに広がっていく。そうした意味合いからも東高瀬川地域における産業集積はシンボリックなものとなる。まだ始まったばかりの取り組みだが、新たな産業クラスターの誕生が楽しみになる活動だ。

(副編集長 中村剛)



辻理氏